
(精神的に)最弱な男の(周りが)最強伝説

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（精神的に）最弱な男の（周りが）最強伝説

【Zコード】

Z5336Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ヤンデレなくしてこの作品は成り立たないと言つても過言ではないでしょう。苦手な方は注意。後から登場人物がほとんど病みます。どうしたのお前ら。

此方もモバゲーのほうから引っ張つてきました。加筆修正を加えてあります、見苦しい点、矛盾点などがありましたら是非とも「一報を。

よくあるような勘違い小説です。主人公と周りの考えが食い違つてゐれです。

勘違い要素は後半に近づくにつれ消え失せます。

プロローグ

何処？ 何処！？ 何処に行つてしまつたのにいさまーー！

暗い暗いお部屋を見渡しても其処には何もなくて、にいさまがいつも使つていらつしゃつた毛布だけが寂しく畳まれ置かれていた。毛布を抱き締め、思いきり息を吸う。ああ、にいさまの香りがする。優しくて甘くて、私の大好きなにいさまの香り。

私の大好きなにいさま。私だけのにいさま。私だけの至高の宝石。

逃がさない……。

心の中でそう呟いて、くすりと笑う。

絶対に逃がさない。逃がしてたまるものか。あの宝石は、私だけのものだもの。きらきらきらきら、あの輝きを見るのは私だけで良いの。誰にも渡さない。

ねえ、にいさま。知つていらつしゃるよね。私、隠れん坊は得意なの。

「シユウカ……、行つてきて」

私の隣で青褪めていたシユウカに命じると、シユウカはキッと鋭く私を睨みつけた。なあに、その目。気に喰わない。抉り取つてあ

げよつか。

「にいさまを見つけたら、すぐに知らせてね
「……命令するな！ 私に命令していいのはあの方だけだ！」

ねえ、喚かないでちょうどいいよ。私、五月蠅いの、きらあい。き
らい、きらい、だいつきらい。おまえ、死んでしまえば良いのにね。
でも、私、優しいもの。殺さないでいてあげるね。あなたを殺す
のはにいさまがお戻りになられてから。
にいさまの御前で、シユウカを縊^{くび}り殺してやるの。にいさま、そ
うしたらきっと私だけを見て下さるわ。

「煩いのよ……。早く、行つて？」

あの子がどうなつても良いのか。シユウカを抱き締めてそう囁いてやれば、大袈裟なくらいにその肩は揺れた。

ねえ、嫌よね。だつてあなた、馬鹿みたいにあの子のこと、大切
に思つているものね。あの子、もうお前を見てくれないのに。
シユウカは小さく舌打ちをして、姿を消した。
ふふ、うふふ、と抑えきれない笑みが零れる。

「ふふ……。すぐに、見つけて差し上げるね、にいさま」

だから、待つていて。何処にも行かないで。誰のものにもならな

いで。私だけを思つていて。

「あなたは、私だけのものなんだから、ね？」

わつ口に出すことで、にこわまが本当に私だけのものになつて下されるような気がする。だから、私、嘘を吐くのよ。いつかその嘘は本当になるけれど。

「ふふふ……、あはははははー。」

プロローグ（後書き）

後からとかそんなこと無かつた。最初つから病んでた。

とある男の人生が変わるきっかけ

2011・12月26日挿絵追加（前書き）

あるお姫様の視点。

広大で豊かな土地を持つこの国の名前は、セルリア国。そして、わたくしの名前はアーリア・フィルニアイル。このセルリア国の姫ですわ。以後お見知りおきを。

今日はあるお祭りがあつて、わたくしは城下町に来たのです。本来ならば、わたくしは城に居なくてはならないのですが……、どうしてもお祭りに来たくて抜け出して来ちゃいました！

あ、でも見つかったら流石に不味いので変装をしているのです。今じる城は大騒ぎでしょうね、お祭りを少し楽しんだら早く戻らなくては……。

騒ぐお父様とそのお父様をなんとか宥めようと四苦八苦する方々の姿が容易に想像出来て、わたくしは思わず遠い眼をしてしまった。

ふと意識を戻すと、何やらやけに周りが騒がしいのに気がついた。お祭りですから、町民たちも浮足立つのはわかりますが、それとは何か違うような……。

「はつ……ー」

も、もしかして、わたくしの変装を見破られた……！？思わず青褪めると、すぐにそつでは無いことに気がついた。それは何故か。町民が恐れ慄き広場から離れようと我先にと駆け

出したから。

お酒に呑まれてしまつた方がまた騒ぎを起しあしまつたのでしょうか……。今日のような口はよくあつてはいけないけれど、よくある」とです。

「……よし……」

ならば、この国の王女としてそんなことを見逃すわけには行くまい。わたくしは気合を入れ、すぐ目の前に見えていた広場に急いだ。其処では、暴れる酔っ払いよりも、もっと厄介なことが起きていた。

「おー！ てめえらー！ 動くんじゃねえ！」

無粋な怒鳴り声。到底、この祭りには似つかわしくない。

「この広場に爆弾を仕掛けた！ 命が惜しかつたらじつとしてるんだな」

そんな男の怒鳴り声が広場に響く。避難しようと走り回っていた方々の動きはピタリと止まり、皆恐怖に強張った顔をしている。中には恐怖で泣き出してしまつ方もいた。

あの顔には見覚えがある。指名手配の、爆弾魔だ。

「この国は、お父様がお治めになられている。だけど、仮にもわたくしは王族。お父様が民を慈しまれるのであれば、わたくしもそうすべき。」

今この時、この国の者はわたくしが護らなければ。

震える身体を叱咤し、そう自分に言い聞かせる。ああ、けれど、いつたいわたくしに何が出来るというのだろう。

男は暫く辺りを見渡すと、わたくしの後ろを見て乱暴に言つた。

「おい、女！　このちに來い。てめえは人質だ。何かあつたときの為にな」

人質……！　思わず唇を噛み締めた。何処までも卑怯な手をする男に吐き氣がする。

ああ、どうしよう。どうすれば良い……？

人質に選ばれた方は今にも恐怖で押し潰されそうになつてているはず。

せめて、せめて励ましの言葉と、そして時間稼ぎをしなければ！　城の兵士たちが駆けつけてくるまで……！

……それでも、どうして、皆さんはわたくしを哀れみの籠つた眼で見てくるのかしら……。

いつまでも自分のもとにやつてこない人質の方に痺れを切らしたのか、わざとよりも大きい苛ついた声で男は怒鳴りつけた。

「おー！　女！　てめえだ！　てめえ……　キヨロキヨロしてねえでさつさと來い！」

後ろを振り向いても誰もいない。

……も、もしかして……、最悪な事態を想定し、たまりと冷や汗
が頬を伝う。

わたくしが呼ばれていたのですか！？

＼ 137740 — 4560 ／

とある男の人生が変わるきっかけ 2011・12月26日挿絵追加（後書き）

爆弾魔の「デザイン」は私が考えたものではありません。

ああ、可哀想に。人質だなんて……。

周りの人たちは彼女を哀れむような瞳で見つめている。そんな目で見ているのだつたら助けてやつたらどうかと思わないでもないが、生憎俺もその中の一人なので何も言えない。女の子の顔は長い髪（なんか不自然だし、髪かも）に隠れて今はよく見えないけど、さつき一瞬だけ見えた。

めつちやくちや 美少女。

多分、この国のアーリア姫様とやらにも負けてない。
本当なら、あんな子は明るい人生を歩めたんだろうな……、なんて。

……なんだか、そんな子が今にも殺されてしまいそうな危ない目に遭つてゐるつてのに、こんなくだらないことを考へてゐる自分が虚しくなつた。

俯いて拳を握る。俺に力があれば、あの子を助けられたかも知れないのに。“れば”なんて考へていたつて、どうにもならないんだけれどさ。

「いや……、」

……もしかしたら、こんな俺でも何か出来ることがあるかもしない。

皆から無視されて目が合えば思いきり顔を逸らされルジンコ以下俺でも（なんか自分で言つてて消えたくなつてきた）、何か出来ることがあるかもしない。

というか、今も無視され続けてる。なんだろ。なにこれ。みんな俺に気が付いてない。

……まあ、あの子を助けるのには好都合かな、と静かに一步を踏み出した。と同時に女の子を捕まえていた男の顔が眼に入る。

「うー、」

怖あああああ！？ 何あの悪人面！？ 無理無理無理無理！？

俺なんか瞬殺じゃん！？

微妙な体勢で足を踏み出し、その足をまたすぐに戻そうとしたもんだからバランスが少し崩れた。いだああああ！？ なんかでかい石にぶつかった！？

「いっ！ クソッ！ 誰だ今石投げて来やがった奴！？」

男は痛そうに石がぶつかったであろう箇所を押さえ、辺りを見回している。そして、その視線はある方向で止まった。

「……てめえか！？」

え、なんであの人の俺のこと見てんの。うう、凄い見てくる。え、何これ。

あっ！ もしかしてさっきバランス崩した時にあの石蹴り上げちゃったの…？

うわ何それ最悪…！ 俺ビリなんの…？ 殺されるの…？ マジでえええええ…！？

「てめえ！ 無視してんじゃねえよ…！」

それできつと俺は曝し首にされるんだ。俺様に逆らつた奴はこいつなるんだぜ、H A H A H Aみたいな感じで俺は殺されるんだ。……いやあああああ…！

周りが眼に入らないくらい考え込んでいた俺だから、咄嗟に命知らずな返答をしてしまった。

「つうるさこ

「なつー…？」

俺は今、たいせつな考え方してんの！ ちょっと黙つて…、えつ…？

一瞬にして静まり返った広場。もともと静かだったのにもうと静かになっちゃったもんだから、俺の呼吸の音すら無駄に大きく聞こえる。

嘘だろ……？ 気付いたときにはもう遅い。俺のこの口はひとつく
に無礼極まりない言葉を発した後だ。

あああああああうるさいなんて言ひちやつた！

どうしようどうしよう！ 犯人さん怒りでブルブル震えてらっし
やる！！ 俺は怖さでフルフルしてる！！ ついに俺はスッパリ（
ドカンと？）やられちゃうんだ！！

何故か真っ青な犯人さんは（怒りを通り越して殺意までいくと顔
が赤から青になるんだろうね、きっと）人質にされた女の子を抱え
たまま、俺に向かつてナイフを振り上げた。やあめてえええええ
！！

「い、このつ…」

恐怖が極限にまで達したとき、俺の足は“立て”という脳からの
命令に反した行動を取った。

……うん、つまり足からガクンと崩れ落ちたんだよね、俺。
さすがにこんな公衆の面前で無様にすっ転んだ日にはもう一度と
外には出れないからなんとか踏み止まる。これ、結構簡単に言つて
るけど実際俺かなり必死だつたから…！

ヒュン、と何かが頭の上を通り抜けた気がした。だけど今の俺に
それを気にする余裕なんてない。

ぬあああああー！ こけてたまるかアアアツー！ 気合を入れ
る為に右腕を高く上に突き出した勢い良く立ち上がる。その瞬間何
か硬いものが俺の手に激突してきた。

「ぐあつ…」

「あや、」

痛あああああー！ 拳痛いー！ またなんかぶつかったよー！ なにこれー！？

俺が拳の痛みに密かに身悶えていると、何故か爆弾魔さんの身体は傾いた。え？ 倒れてんの？ なんでー！？ と、とにかく避けないと！

そう思つた瞬間、俺の眼に地面に倒れ込みそうになる女の子が飛び込んできた。

ああああなんかあんな綺麗な子に傷がつくなんて俺が個人的に耐えられないー！ 必死こいて女の子を支える。柔らかな重みが俺の腕に伝わった。

「、大丈夫か？」

「は、はい」

消え入りそうな声で女の子は頷いた。それなら、と俺は女の子から少し距離を取つた。いつまでも俺が触れてたら女の子が穢れちゃうもんね。

うーん、それにしても、よく見れば見るほど美少女だ。なんか高貴な顔立ちしてる。

(あれ……)

ふと、俺は女の子の肩についた黄色の何かに気付いた。よく見て

みるとそれは鳥の羽根だった。向日葵みたいな明るくて綺麗な黄色。もしかして、この羽根の持ち主って城の庭によくいるあの黄色い鳥かな。

この国の王様は非常に寛大な人で、（普通は有り得ないだろつけど）城の庭を一部、一般市民に公開している。

普通に出入りが出来るし、兵士さんに一言伝えれば咲いている花を持ち帰つても良いんだそうだ。

俺も入つてみたかったけど人がたくさんいて怖くて入れなかつた。それで未練がましく遠目から見てたときに、城に黄色い鳥がいるのを見つけたんだよね。

此処ら辺では飛んでるのは全然見かけないし、多分城にだけいる鳥（飼われてるのかな）なんだと思う。

そんな鳥の羽根が女の子の肩についてるつてことは……。考えながら俺は羽根を取つてあげようと手を伸ばした。

「城から出てきたのか……。いけない子だな」

あの鳥、多分城から脱け出したんだな。迷子になつたらどうするんだろう。……俺みたいな阿呆じゃないんだからならないか。

手に取つた羽根を放し、地に落とす。

感じた熱い視線に顔を上げてみると、女の子は酷く驚いた顔をしていた。

ええ！？ なんで！？ あれかな。俺のあまりの不細工さに驚愕したのかな。“こんなに醜い生物がこの世に存在していたなんて……！” みたいだ。

……やめよう、考えてたら心が痛くなつてきた。

特に何も言つることもないのに黙りこむ。なんだか気まずい沈黙が流れている気がする。逃げ出したい。

「……それじゃあ、俺はもう行く」

「あ、待つて下さい！ あの、お名前は……」

えええっ！？ 俺なんか名乗るほどの者じゃないって！！ つい
うかただビビつてただけの俺の名前訊いていいどうするつもり
！？

後ろで女の子が他にも何か言つてた気もするけど、俺は恥ずかし
かつたからすぐに逃げた。
突き刺さる周りの眼が痛いよ！

男と姫（後書き）

文が乱れていますな。

この小説を書き始めたのは実は小学五年生の頃だつたりします。そのときからだらだらだらだらと続けておりまして。あ、どうでもいい？

どうすれば……！

焦りと不安が心の内からべちゃりべちゃりと這い出て思わず叫びそうになる。

だけど、この男に弱みを見せではない。少しでも隙を見せれば、すぐに付け込まれる。

そして、何よりわたくしは王女なのだから。そんなちっぽけなプライドがわたくしの理性を寸でのところで繋ぎとめていた。

（慌てては、駄目）

そう、今は落ち着かなければならぬ。

こんなときこそ冷静に、そして確実な突破口を見つけなければならぬのだ。

ああ、だけど、いつたいどうしたら良いの？

首元で構えられたナイフのせいで身動き一つ出来ないし、わたくしがこうして人質になってしまっているのだから臂は手出し出来ない。

何も出来ない無力な自分に涙腺が緩みかけたとき、何かが此方に飛んできた。

つ……石ー？

飛んできた石は見事なコントロール力を披露し、男の頭に命中し

た。痛みに頭を押さえ、次いで羞恥と怒りに顔を赤く染め上げる。

何を馬鹿なことを！

わたくしは、そう怒鳴り散らさなかつたのが、不思議なほどだつた。

この男はナイフを持っている。それに加えて広場に仕掛けられたという爆弾。それを起爆させるかどうかはこの男が握っている。迂闊なことをすればどうなることか……！

「いつたい誰が……！」

愚かな者の顔を握りでやわらかく顔を上げた瞬間、時間が止まつた気がした。そう感じたのは、きっとわたくしだけではないだろ。

艶やかな少し長めの黒髪。切れ長の赤い、紅い瞳。白い肌。細いけれどちゃんと筋肉のついた体。人形の様に整つた顔。

余りにも整い過ぎた彼に暫しの間見惚れていた男だつたが、すぐに氣を取り直したように喚き散らした。

「つ！ て、てめえ！ 無視してんじゃねえよ……！」

その言葉に、彼は小さく一言。

「つぬせー」

「なつ！？」

たつた、それだけ。たつた一言だけの言葉だと叫うのに、それはとても冷たくわたくしは言い知れぬ恐怖を感じた。一瞬で、この場は彼に支配された。

の方はわたくしたちが怯えているのを感じ取つたのだろう。（逆光で表情はよく見えないけれど）小刻みに、心底可笑しそうに体を震わせていた。

声を出さずに笑うなんて、なんてこの方らしい

「い、このつー。」

恐怖に耐えきれなかつた男は、己を励ますように懲とらしく大声を上げ、彼のほうへ向かつた。

顔は真つ青で身体をガタガタと震わせ、情けないはずなのに、あの方の前ではそれも仕方ないと思つてしまつ。

そして、それを嘲笑うかのようにあの方の身体の震えがより一層大きくなつた。

馬鹿な奴め、と声に出してこやしないけれど、そつ言つてゐるよう

に聞こえた。

ああ、馬鹿な人ですわね。あの方が呆れた顔をしているのに気付かないなんて。

ああ、愚かな人ですわね。あの方に勝てるものなんてこの世に存在するわけがないのですのに。

ああ、わたくしも馬鹿で愚かですわね。あの方の冷たい瞳の中にチラリと映つただけでも体中が震えあがるほど嬉しいだなんて！

視線が一瞬だけ交わった気がして、それさえにも恍惚のため息を吐きそうになる。

ああ、なんて幸せなのだ。「——この御方の御前に在ることを赦されるだなんて……！」

男は愚かにもナイフを振るい、彼に攻撃を仕掛けた。しかし、その攻撃は容易に避けられ、男は彼の反撃を受けた。

「——、と鈍い音が聞こえて、そして傾いていく身体。

「さや、」

まずい。なんとも言えない感情が背を駆け抜けた。

咄嗟だということもあるけれど、そもそも非力なわたくしが大人の男の全体重を支えられるわけが無い。そのまま男と共に身体が地面に近付いていった。

遅い来る痛みに備えて全身に力を籠め、目を固く閉じる。しかし想像していたそれは来ず、代わりにやつてきたのは軽い衝撃。いつまで経っても痛みはやつてこない。

恐る恐る目を開けてみると、あの方の端正な御尊顔が目の前にあつた。

「……大丈夫か」

冷たくも優しいそのお言葉に返事をする。彼はその切れ長の瞳を僅かに緩ませたように見えた。

不意に、彼が手を伸ばし、わたくしの肩に触れようとする。

あ、ええつ！？ な、何をなさるおつもりですか！？ まさか、あの、お姫様を救出した際には欠かせないあの王道イベント……！？ しかし、彼の手はすぐに離れ、その手に握られていたのは……。

(は、ね……？)

「城から出てきたのか……。いけない子だな」

黄色い羽根。美しいそれはお父様が気に入つて商人から買い取つた鳥のものだ。普段は庭に放してある。

城から脱け出す前に少し戯れていたから、服についてしまつたらしい。全く気が付かなかつた。

あの鳥は、城から出てはいない。城から出られるはずがない。専用の調教師がよく躰をしているから。

つまり、彼の言葉は、

(わたくしに、向けられたもの)

国民にこれ以上の混乱を招いてしまわないよう、敢えてぼかされたその言葉。

当たり前のように吐き出されたそれに、驚きだなんて感じなかつた。

だつて、彼にとつてわたくしの変装を見破るなんてとても容易いことなのだ。きっと、彼の前にはどんな小細工も通じない。改めて感じる圧倒的な実力に、恐れを通り越して感激する。

「…………」

思わず黙り込んでしまつと、彼は不意に仰られた。

「それじゃあ、俺はもう行く」

彼の背を見ただけなのに、わたくしは迷子になつてしまつたときのような不安を感じた。

待つて、行かないで……！

「！　あ、待つて下さい！　あの、お名前は……」

せめてお名前だけでも。そう思つて投げ掛けた言葉は彼の方には届かず、そのまま行つてしまわれた。

柄にもなく声を張り上げもしたのだけれど、振り返りもして下さらなかつた。

ああ、酷い、酷い。酷いお人。

でも、でも……、またお会いできるでしょうか……。

思わず憂いのため息を吐き、まるでそれがお話で読んだ恋に悩む少女のようすで、一人赤面した。

ちなみにわたくしが城から脱け出したといつてはばれてこませんでした。

良かつた良かつた。このまま黙つていようかしさ。

SIDE 姫（後書き）

王道イベントってのはあれです。接吻です。
色々阿呆な子なんです。思考がぶつ飛んでるんです。これでも登場
人物の中ではまだマシなほうなんです。

男、捜される

ぶらぶらと特になんの目的も無く町を歩く。ふう、とため息を吐き、なんとなくほのぼのとした気分になつた。平和つて良いなあ……。

……あ、ところであの入質にされてた女の子、本当にお姫様だつたらしいんだよね。

驚きの新事実！ 通りで可愛いと思った。

あと、人質にされてたときに助けてくれた人がいたらしくて、その人を探してるんだって。

で、その人（男の人なんだって）は名前も言わずに何処かに行っちゃつたらしい。

……うん、直接聞いたわけじゃないんだよね。歩いてたらちょうどそんな話が耳に入ってきただけなんだよね。

俺とお話してくれるお友達なんて一人しかいないからさー！

なんでかみんな俺のこと見てヒソヒソ話しあり、顔赤くしたりするし。

そうですね！ 俺の不細工な顔見て顔赤くするほど怒ってるんですね！

ああ……、噂に聞く男の人ぐらい俺にも勇気つてものがあつたら今ごろ友達五人くらいは出来てたかもなあ……。

いや、五人なんて欲張らない。三人、三人で良いから……！

俺がそんなことを考えていると、突然背後から声をかけられた。

「あなたは！」

「……？」

振り向き、思わず疑問符を飛ばす。誰、この人。鎧着てるし……、
城の兵士？

城に知り合いなんていらないんだけど。寧ろ話しかけてくれる
人いないんだけど。

ちょっと頭が混乱しかけた頃にお兄さんは声を張り上げた。

「おーい！！ 間一！ 見つけたぞ！ きっとこのお方だ！！」

あんまりにも大きな声をいきなり出されたから吃驚した。そして、
その言葉の内容にも吃驚した。

なに？ なんの話？ このお方って誰？ 俺のこと？ え？ な
んで？

「姫様が言つていた特徴と酷似しているし、それに……、

ねえ！ ねえ！！ いやいやいやいや！！ 待つて！ 待つて！
とりあえず待つて！！
え！？ 何事！？ 何が起きたの今！！ なんかすつごい怖い顔
の人達がこっち来るんだけど！！

兵士はなかまをよんだ！

兵士B かあらわれた！

兵士がおそれねた

兵士……、カエデは混乱し、こんなこと考えてる場合じゃないだろ!! 駄目だ今の俺ホント混乱してる!!

思いつきり慌てていのと、お兄さんはそんな俺に構う様子を一切見せずに口を開いた。

「あの、少しうまこうじつか?」

珍しくありませんか？何かああああ！？
で、でも答えないともしかしたら“バツサリー”ってこの展開に
なりそうだし……。

「何か用ツ、か」

カミカミ王子が降臨なされたぞおおおおおおーーー
どういうことーーー どういうことなのーーー
つまつたよ！ 今めちゃくちゃつまつたし、かんだよーーー？ なに、
死ねば良いの？ 消えれば良いの？
どうしよう！ お兄さんの俺の印象が“ 敬語も使えない醜男 ” に
確實に固まっちゃったよーーー

見た目すでにマイナスなのに更に評価下げて何がしたいの！？
今のお兄さんの俺に対する評価は奈落の底だよ！！

お兄さんは（不快からか）眉を寄せ、静かに言った。

「貴方に城に来ていただきたいのです」

「なんで!? 僕遂に御用!? なんかしたつけ!/? 僕の存在自体が罪ですか!/?

どう答へても俺にとつて悪い方向に行つちゃうような気がして思わず黙り込む。そんな俺をじつと見つめるお兄さん。

やめて! そんなに睨みつけないで! !

「……わかった」

!!

恐る恐るそう返事を返した途端、俺は重大な間違いを犯したこと

に気が付いた。

け……敬語にすんの忘れてたああああ! !

昨日、姫様が王様に珍しく我儘を仰られていた。

……いや、あれは我儘のうちにに入るのだろうか。王様は初めて我が儘を言われた、嬉しい等と騒いでいたが。

私はあんなに喜ぶ王様がなんだか哀れに思えて何も言えなかつた。常日頃から思うのだが、王様は余り姫様から頼りにされていないのだろうか。

私が王が逃げ出さないように見張つていた（近衛の本来の仕事はこんな間抜けなものではない、はずだ）ときだ。

姫様が何処か思い詰めたような顔つきで王座の間におりでになられた。

「お父様。少し、わたくしのお話を聞いていただきたいのですが……、お時間大丈夫ですか？」

王様は少し驚いたような顔をしながらも、嬉しげに顔を綻ばせた。王様は酷く子煩惱である。それに最近、御家族と触れあえる時間が少なかつたのもあるのだらう。

「うん。最近は忙しくて構つてあげれなかつたけど、僕の仕事もよ
うやく一段落ついたからね。大丈夫だよ！」

王様がそう仰せられると、姫様も安心したよつて表情を和らげ、
話を切り出した。

「あるお方を、探していただきたいのです」
「あるお方？」

思いも寄らぬ要求に王様は鸚鵡返しにお訊ねになつた。姫様は頷
き、続けられた。

「先日、お祭りがあつたでしょ？」
「え？ あ、ああ、あつたね」

突然の話題転換に戸惑いながらも王様は頷いた。姫様の視線が気
まずげに王様から逸らされる。少しだけ嫌な予感がした。

そういえば、祭りのとき姫様についている侍女が何やら慌しかつ
たような気がする。

生憎私も王様も祭りの管理やその他諸々の仕事に追われてその事
態を把握するまでには至らなかつたが。
意を決したよつて姫様が御顔を上げられた。

「お気つきになられていらっしゃらないなら黙つてこよつとも思つたのですが、……正直に、言こますね。わたくし、その時に城から抜け出してしまつたんです」

氣まづげに吐き出されたその言葉に王様の表情が固まる。
姫様を御叱りにならうと思つたのだろうか。椅子から腰を浮かせて、またすぐに座つた。このお方に自分の子供が叱れるわけがないのだ

「ま、まあ、過ぎがやつたことは仕方ないし……、うん、許してあげる」「あ……ありがとうございますーー」

姫様はパッと表情を輝かせた。それを見た王様の頬はゆるゆるに緩んでいる。こんなだらしない顔は下の者には見せられないな、と内心呟いた。

しかし、いくら忙しかつたとはい、姫様に城を脱け出されてしまつとは、なんといふことだ。

警備を強化しなければならないかもしれない。もし“逆”があつたら困る。

「それで……、そのお祭りの時にひょいとお城に引き渡された賞金首の爆弾魔がいたでしょ?」

「うん、いたねえ」

ああ、そういえばそんな者がいたな、と記憶を手繰りよせる。確かに広場に爆弾を仕掛けたところを素性の知れない男にこじてんぱんにやられてしまったのだと。

正直、私は爆弾魔よりもその素性の知れない男のほうが怪しくて堪らない。

「それでわたくし、その爆弾魔に人質にされてしまつて……」

「な、なんだつて！？ それで、怪我は無いのかい……？」

顔色を変え、今度こそ椅子から立ち上がった王様は姫様に近付き、怪我が無いかを調べるよつた仕草をした。

姫様は王様の鬼気迫るような表情に驚いたのか、きょとんとした顔をして、それから嬉しそうに微笑んだ。

王様はそんな姫様に気付いて不思議そうな顔をしている。微笑ましい光景だ。

「大丈夫です。その時にわたくし、さつき言つたあるお方に助けていただいたので。それで、そのお方にお礼を言いたくて……」

「……そうかい。そういうことなり……」

「というのは建て前で」

心得たといったふうな王様の顔が、もう一度疑問の色に染まる。姫様は頬を染め、愛らしく微笑んで言った。

「実は、もう一度そのお方に会いたいっていつのが本音なんですか
れど」

その言葉を聞いた途端、へにやりと王様の眉が下がった。少しだけ、目が潤み始める。貴方はいったい今年で幾つになるのかと小一時間ほど問い合わせたい気分になった。

「……遂にアーチャンも僕のもとを離れていつてしまうのかい？」

「……お父様？」

姫様が怪訝そうな顔で王様の顔を覗き込む。瞬間、王様はがばりと姫様を抱き締めた。姫様の息を呑む音が聞こえた。

「僕ツ……、アーチャンをお嫁に出したくないいい！」

耳元で叫ばれたものだから少し五月蠅うにしておられたが、王様の発せられた言葉を理解した途端、目を見開き怒鳴った。

姫らしからぬ行動だ。あとで世話係に言いつけておくか。今度姫様にお会いしたときに怨み言を吐かれてしまつかもしれない。

「およひ……！？ ち、違います！ そんなことにはなりません！
勝手に突っ走らないで下をこましー。」

「でもアーチャンはその人の事好きなんだろー！？」

図星をつかれた姫様の頬が林檎のよつに真っ赤に染まる。

「なつ、……！　えと……。とにかく！　その方を探していただきたいのです！！」

納得が行かないといつたよつに唸る王様。子供ですか、みつともない。そんな真似はやめていただきたい。

王様と姫様の視線が交わる。どちらも目を逸らさない。先に折れた王様が、ため息を吐かれた。

「……アーチャンをお嫁には出したくないけど……。仕方がない、探してあげるよ」

「だから違います！！　えつと、それで特徴は……」

姫様もお年頃であらせられる。私もまだ年端も行かぬが、娘を持つ身。可愛いから離れたくないという気持ちも少しあはわかるが、良い年なのだからいい加減子離れをしていただきたいと思う。だが、これは良い。姫様に好いた者が出来た。なんと素晴らしい。これを期に少しあは王様に落ち付きといつものが出てくるかも知れない。

必ずや姫様を助けたといつその男を探し出し、御前に連れていかねば。

「とは言つてみたものの……」

ため息を吐き、ぐるりと辺りを見回した。

こんな大きな国から、たつた一人の男を探すというのも、な……。あの祭りは結構大きくて有名なものであるし、遠いところからわざわざ見に来る人間もいるほどだ。本当に見つかるのだろうか？そもそもあの男が国内の人間だという保障もない。

まあ、とにかく探すだけ探してみようとふと前を見ると、男が私の目の前を通りた。

ただの男だつたら特になんとも思わない。そのまま捨て置く。しかし、彼はただの男ではなかつた。一般人とは明らかにオーラが違う。

そして何より、驚くほど綺麗だつたのだ。

男に綺麗などという表現はおかしいかもしだれないが、それ以外にどう表現して良いのかがわからない。

恐ろしいほどに整つた容顔と、黒髪紅目。

間違いなくこいつ……、いや、この方が姫様の言つていたお方だ。彼は私に気が付くことなく、そのまま雑踏の中へ消えて行こうとしている。

行つてしまつ……。そう思つた途端、私は言い知れぬ不安に駆られ、この口は勝手に動いていた。

「あ、あなたは！」

「……」

訝しげに彼は私を見た。当たり前だ。初めてお会いしたのだから。だが、この方に私というものが存在しているということを知られていないというのが、とても苦しかった。

私はそんな気持ちを誤魔化すかのように、彼を見つけたということを皆に伝えた。

暫くして皆が集まり、神をも超越したようなその存在に息を呑む。姫様が仰せられていた特徴全てに当てはまる。それに……、彼の前で言いかけた言葉を、心中で呟く。

オーラが、一般人のものではない。姫様がお会いしたという彼で間違いは無いはずだ。

(「いや、存在するはずがない」)

彼に逆らって良い者はきっとこの世界の何処にも存在しては居ないのだ。(「いや、存在して良い筈がない!」)

ああ、どうすればいいのだろう! 私など彼の前には塵にも等しき存在だらう!

「つあの、少しよろしくでしようつか?」

「.....何か用か」

明らかに不愉快だとでも言つたくなその反応。

あああ.....! 怖い、怖い、怖い、怖い! !

今すぐ氣を失つてしまいたいほどだった。だけど、この方の前で、そんな醜態を晒したくは無い。

「あな、たに城に来ていただきたいのです.....」

ずっと喋り続けていないと、恐怖に呑まれ、身動きが取れなくなつてしまつた。酸素が足りなくなつてしまつたかのように頭がくらくらする。

私を絡め取るその恐怖がじわりじわりと足元から這い上がり.....、

「わかった」

その言葉を聞いた途端、何かから解放されたような、そんな気がした。

フツと息を吐く。いつのまにやら止めていた呼吸を再開し、少々荒くなってしまった息を整える為に、胸に手を当てる。

彼が、城に来て下さる。良かった。断られたときには、どうなつていただろうか。

……いや、わかりきつている。あの美しい方が拒んでも、私はきっと連れて行こうとしていた。

そんなことをしたら、私は彼に殺されてしまう。

SIDE 兵士（後書き）

長い？

今回は勘違いといつよりもその男の持つ雰囲気に圧倒されただけって感じですね。

いやあ、勘違いもの書いてると痛々しい表現使つても多少は見逃してもらえるから楽しい楽しい。

主人公の名前は次回出る予定。普通は一話から出すよな。

僕の愛しい娘が先日、爆弾魔に人質に取られてしまつたらしい。そんなことを後から聞かされて、僕は大層慌てた。

幸いなことに勇気ある若者に助けてもらえたし、傷一つ無かつたが、それでも心配なものは心配だ。子を持つ親ならば仕方ないだろう。

「王様！ 姫様が言つていたと思われる方をお連れしました！」

「ホント？ ご苦労様。下がつていいよ」

「はっ！」

可愛い僕のアーチャンを助けてもらつたことには本当に感謝している。だから、僕はその若者に褒美を取らせようと思つた。

その子が望むなら出来る限りのものは叶えてやりたい。

娘を助けてもらつたつていうのに、褒美だけ取らせてはい终わり、つていうのは何か気が引けるけども、何もしないよりはましだろう。

……多分。

さて、あの子が言つていた子は、どういう子なんだろ？

爆弾魔を一瞬で倒したつていうくらいだから、きっと物凄く強そうな、如何にも屈強の戦士つていう感じの子なんだろうな。

僕の頭に思い浮かんだ筋骨隆々、幾度もの闘いで負つた傷跡を至るところにつつけた男。

……」「みんなの来たら失礼だけど、なんかやだなあ……。

「あれ、でも……、」

でも、アーチャンは随分綺麗な子だつて言つていた気がする。ああ、どうにしろ性根は優しい子に違いない。そう考えると樂しみだ。

横に控えているアーチャンを見ると顔を真つ赤にしながら、熱心に入口のほうを見つめていた。

なんだか寂しくなつて思わずアーチャンに田舎じをする。怒られた。

でも、この子がこんなに待ち望む子つて、本当、どうにう子なんだろう。

期待に胸を膨らませていると、視界の端つこのまつで扉が開くのが見えた。

ああ、来たのか。伏せていた田を上げ、思わず見開いてしまった。

「……」

かつん、と床と靴がぶつかりあつ、渴いた音が響いた。

生きているものなど存在しないかのような、異様なほどまでに静まり返ったこの場に、靴の音はとても大きく聞こえた。

自分の呼吸の音が嫌に耳につく。

見開いた中に彼が映り、予想以上だった、と。

僕が思い描いていた想像なんて馬鹿げていると怒鳴りつけたいくらいい、その子は綺麗だった。

綺麗つていうか、うん、あの……、もへ、……ああ……自分
の語彙力の無さに思わず泣きたくなる。

でも、きっとどんな高名な詩人でも、あの子を表すのに相応しい言葉を見つけられやしないんだろう。

「…………」

ほつ……、と思わず息を吐いた。アーチャンも、同じく。

ああ、あの子は、神がこの世にやつた遣いなんじゃなかろうか。
そんな馬鹿な考えまで思いつく。

でもそれはあながち間違いじゃないのかもしれないな、と思い直す。だって、彼はそれほどまでに美しい。

かつん、もう一度靴が鳴った。

「つ、あ……！」

よやく、自分が硬直し、間抜け面を晒したままだと気付いた僕はすぐに取り繕つように笑つてみせた。

もう遅いだろうけど、馬鹿みたいに動搖したことを悟らせないよ
うこ、出来るだけ平然としたように、気安く話しかけた。

「ねえ、君がアーチャーの言ひた子かな？」

そう言ひて、この子はアーリアのことを見つけていたんだらうが、と疑問に思った。少し間を置いて、一言付け足す。

「あ、ちなみにアーチャーなんつていうのは、僕の横に居る可愛い可愛い可愛い女の子のことね」

「あ、お父様っ！ あの方になんて失礼な……」

自分でもよく此処まで口が回るものだと思つ。だけど、きっとこれは人間の中に少しだけ残つてゐる獸の防衛本能なのだろう。話し続ければ、呑まれる、魅入られる。戻れなくなる。しかし、それでも良いと思つてしまつ僕は、すでに彼に墮ちていふんだらう、なんて思つてみたり。ああ、じゃあ戻れないね。

「まあ……」

上げられた口許。それは、笑みといつにほとも冷た過ぎるものだつたけれど。

一国の王と姫を前にして、この無礼なふるまい。

でも、この子には丁寧な言葉使いとかそういうのは似合わないなと思つた。寧ろそんなもの壁を隔てられたみたいで、嫌だ。

「あ、僕の名前はウイルザ・フィルニアイル。君の名前はなんてい

うの？」「

「つわ、わたくしはアーリアと申します！」

良かつたら教えてくれる？『気安く』こと言つていたつて、本当は物凄く緊張してる。ねえ、教えて。早く知りたいな、君の名前。

彼は暫くしてから、ゆっくりと形の良い唇を動かした。

「……カエデ。カエデ・クレハ」

その名を聞いた途端、なんて言うのかな。凄く、耳に馴染んだんだ。しつくりきたつていうか。ああ、とっても綺麗な響き。

「、カエデくんか。良い名前だね」

「カエデ様……ですか。良いお名前ですわね」

僕とアーチャンが同時に言つた。これはぐだらない社交辞令だとか、そんなものじゃない。本心からのものだ。鮮やかな紅い瞳を持つ彼にぴったりの名前。

……彼の顔がちょっと緩んだ。嬉しかったのかな？ 今度は、さつきみたいな冷たいものじゃなくて、すつごく綺麗な笑顔。名前を褒めただけで嬉しがってくれるだなんて、意外と子供っぽい可愛いところあるんだなあ、とちょっと微笑ましくなる。ああ、アーチャンあの顔、直に見ちゃつたんだね。顔が真っ赤だ

よ、可愛い。ちょっと微妙な心境だけれども。

……でもさ、嫉妬よりそれ以前に、その気持ちが分かっちゃったんだよね。

だって、あの子と同性であるこの僕までもが、あの笑みに見惚れてしまつたのだから。余裕ぶつてみたつて上がる顔の熱は誤魔化しきれない。

ポーカーフェイスの練習とかしたほうが良いかもね。こんな自分の思つていることを表情に出していたら大変だ。

「俺は、何故呼ばれた？」

「ん？ 君がアーチちゃんを助けてくれたつて言つからや、お礼をしちゃつて」

にっこりと笑つてみせると彼はゆるりと首を振つた。

あ、あれ……？ もしかして、僕からの施しなんて受けたくないつてこと、かな……。

「……そんな大したことはしていない」

「……あ、いや、君はそうかもしないけどさ、」

あ、そうじやなかつたみたい。

押し寄せる安堵からちょっとだけ気が緩んだ。

というか結構遠慮するなあ、君。僕が良いつて言つてるんだから、お礼、受け取つてくれれば良いのに。

「僕にとつては大切な娘を助けてくれたヒーローみたいなもんだか
「う

あ、迷ってる、迷ってる。よし、駄目押し。【秘儀・仔犬の目】！
説明しよう！ これは美形、もしくは小動物属性の人間にのみ許
される技だ！ これを場面によつて使い分ければ敵を作ることはな
いゾ！

ただし技を使う側の人間の年齢が上がるほど効果は下がっていく
ので注意しよう！

ちなみに僕は麗しのお姉様方によく活用してたかな。おかげで上
手くこの世界を今まで生き抜いてこれました。いえい。

でも、この間、息子に使ってみたら踵落としされちゃつたよ。そ
んなに気持ち悪かつたかな。僕、実年齢より凄く若く見られるから
まだイケると思つたんだけどなあ。

「ね、駄目……かな？」

技を披露しながら言葉を吐き出してみたところで気が付いた。
あれ、これやっぱいんじやないかな、僕。カエデくんにも踵落とし
されちゃうんじやないかな。

そんなことされたら一週間くらい軽く引き籠もる自信あるよ。

「……わかつた、良い」

杞憂だつたみたいだ。心底安心した。カエデくんは諦めたようこの目を伏せ、そう言ってくれた。

うん、まあ、カエデくんみたいな綺麗な子だつたら、それはそれで新しい世界の扉が開けるのかもしれないね。僕は僕の可愛い奥さんとしか聞く気ないけど。

ああ、でも良かった！ これでお礼が出来る！ …… つてのは、ただの建て前かな。この神のよつた存在の彼の傍に少しでも長く居たといつて言つのが本音だ。
うーん、でもなあ……。

（お礼、考えてなかつたや……）

最初はお金になるものを渡してあげよつと想つたんだけど、それつて今考えればすつごく失礼だよね。どうじよ……。

渡しても良いのかもしないけど、そういう物とかを渡したらもうそれで終わりでしょ？

僕とカエデくんを繋ぐ糸は此処で途切れていは終わり。やだなあ、それ。

んー……。あ。

（やうだ）

糸が無いなら、自分で新しく繋げれば良いんだ。

「ん！ 良かつた、良かつた！」

物凄一く機嫌良さげに笑つた僕に、アーチャーさんが訝しげな顔を向けてくる。うん、よくわかってる。

こういう顔したときの僕のすることって、アーチャーたちにひとつて良いことがあつた試しがないもんね。でも、大丈夫だよ、今回は。だって、アーチャーんだつてカエデくんのこと、気に入ってるだろ？

「じゃあ、お礼つていうのは、アーチャーさんを君のお嫁さんにするつてこととでビーオ？」

「なつ！ お、おと、お父様！？ な、何を言つておられるのですか！？」

「…………は…………、」

アーチャーさんは顔を真つ赤にして僕を見上げた。カエデくんはちょっとだけその切れ長の瞳を大きくした。

此処まで驚くとは予想外。いやあ、自分に振り回される人間を見てるのつて、なんだか気分が良いよね！

男と王（後書き）

可笑しいな、修正前と比べてウイルザの性格が大分悪くなつた。
王族らしからぬ王族、好きです。

こういう感じの人政務ちゃんとやつてたらなんか良いよね。ギャ
ップ萌えみたいな。
こいつは出来なさそうだけれども。

この作品をお気に入り登録している人は、つての見てみたらヤンデ
レものが凄く増えててビビりました。

あれから俺は兵士たちに連れられ、入城した。

俺、お城つて壁一面中に金箔とか張つてあつて落ち着かない感じ
なのかと思つてたんだけど、そうじやないんだね。

メイドさんたちや兵士たちと遭遇するたび、すつゞく氣まず
い。皆こっち見てくれない。見てくれても一瞬。

国レベルの虐め受けたのなんて初めてだからすでに心が折れそう
だ。

「此方が王の間になります」

「…………」

え……、いきなり？ なんにもなしにいきなり王様に会わせられ
ちゃうの？

でも、ここまで来ちゃつて帰りますだなんて言えないよね。うわ、
心臓ばくばくしてる。怖い。

いや、頑張るよ！ 仕方ない！ 俺も男だからね！ 腹括るよ！
…………ごめん嘘！ 誰か助けて！！

だけど、そんな俺の心の叫びに誰かが気付いてくれるわけもなく、
王の間に繋がる大きな扉はゆっくりと開かれていく。

ああっ！ ホント待つてよ！ まだ手に入つて三回書いて呑み込
むのやつてない！！

そう言おうと思つて後ろを振り向いても誰もいない。横に向けても誰もいない。

みんな移動早過ぎなんだけど…… そんなに俺と一緒にいるのは嫌ですか！ ですよね！！

せめてもの抵抗で俺はゆっくりと歩みを進めた。かつん、かつんと耳障りな俺の靴の音が響く。なんとかすつごく静かだからホント響く。ちょ、今だけ俺の足音消えてくんないかな。

やつとの思いで王様の前に出ると、王様は呆然としていた。すいません！ 本当すいません！ 人間かと思つて待つてたら召喚されてたのはクリーチャーだったっていうね！！

俺が心底申し訳なく思つていると、王様はハツとした顔をして笑つてくれた。うわ優しい！ でもその愛想笑いが引き攣つてているのは見ないふりをしておこう。挫ける。

「ねえ、君がアーチャーの言つてた子かな？」

アーチャー……？ 内心首を捻つてるとそのことに気が付いたのか、この子のことね、と王様は横にいた女の子を示した。

王様イケメンすぎる！ なにこのフォローの天才！ でもすいませんその子知らない！

……あれ？ でもなんか見たことあるような……。うん、此処は誤魔化しておこう。

「まあ……、」

……この受け答えはどちらかっていうと否定の意味になっちゃうかな……。

あつ、待つて。姫様にもしお会いしてたとして、それ覚えてないって最悪じゃない？

やつべ俺打ち首にされる！ これ絶対ばれたよね！ 誤魔化しきれてないよね！

その後愛想笑いしたけど俺の不細工な顔じゃ誤魔化す事もできないよー！ 王様の顔引き攣つてるし！ すみませんね汚いもん見せちゃつて！

「あ、僕の名前はウイルザ・フィルニアイル。君の名前はなんていうの？」

「つわ、わたくしはアーリアと申します！」

“君の名前を教えてくれる？”と王様。

敢えて俺の顔には触れないとか王様もう素敵すぎる！ イケメンでフォロー出来て大人とかどういふことなのー？

「……カエデ カエデ・クレハ」

「、カエデくんか。良い名前だね」

「カエデ様……ですか。良いお名前ですわね」

奇跡が起につたぞ皆の衆ひひひひひひひひ……！

王様が俺の名前褒めてくれたっていうのもわざだけ、あんな美女に微笑みかけてもらえるとか！！

怖い！もう怖いよ！後が怖い！！上げて落とす作戦か！！ああでもやっぱ嬉しい！ちょっと今だけクリーチャーがよじけうやうけび許してね！！

気持ち悪い笑みを晒しながらふと思つた。

ところで俺つて、なんで呼ばれたんだろ？

訊ねると王様は一言。“君が自分の娘を助けてくれたから”。：

うん？

「……そんな大したことはしていない

ていうか出来ないのほうが正しいかな。

それにお姫様助けたのって俺じゃなくて勇敢な誰かでしょ？凄いよなあ、俺には絶対真似出来ないし。

「いや、君はそういうかもしれないけど、」

違つて言つてたのに、なんとか王様はびつしても俺をそのヒーローにしたいらしい。

いや、でも俺なんにもしてないから、お礼とかもらえないよ。心苦しい。

このままなんとか帰れないかな……。ちょっと困つていると、王様が王座から降りて俺のもとへやってきた。あ、やばい。斬られる？

「ね、駄田……かな？」

田が！ 田があああああ！ ！

やめて！ イケメンをそんなに無駄遣いしないで！ ！ 僕じゃなくともっと使いべき相手がいるでしょ！ ！

ところで思つたんだけど、王様の娘つて横にいるその姫様のことをどよね？

……王様若くね？ 二十代にしか見えないんだけど、どうこうして？

「……わかつた」

居た堪れなくなり、俺はつい言つてしまつた。ああああ！ すみません名前も顔も知らない勇敢なヒーローさん！ ！ 手柄を横取りつて最悪だよ！

俺の返事に王様は嬉しそうにヒーヒーヒと笑つて、超ド級の爆弾を落とした。

「じゃあ、お礼つてのは、アーチャンを君のお嫁さんにするつてことでビーオ？」

「なつ！ ！ お、おと、お父様！ ？ な、何を言つておられたのですか！ ？」

「……は、」

し、
真の爆弾魔はあなたでしたか！！

SIDE カエデ（後書き）

人物紹介

カエデ・クレハ

性別・男

一人称・俺

容姿・黒髪紅目の中青年。色白。年は二十歳くらい。

性格・チキンなのに何故か皆に良いほうに勘違いされてしまう可哀
そうな人。大食漢。 ぶっちゃけこの設定いらなかつたと思ってる。

座右の銘・“平凡”。到底無理。

備考・顔はいいから密かにファンクラブがある。何処生まれだとか
そういう事が一切分かつてない。記憶喪失（実はあつたもう一話を
削つてしまつたので初見の方はえつ！？ってなつてると思う）。

アーリア・ファイル

性別・女

一人称・わたくし

容姿・金髪に緑の目の美少女。くりくりした大きな瞳がチャームポイント。十代後半。

性格・ミーハーかもしない。でもしっかりお姫様やつてます。

先日の出来事・カエデファンクラブに入会。

備考・セルリア国の皇女。恋する乙女。カエデに助けてもらつた後、カエデのファンクラブがあることを知つた。あとは上記の通り。それで良いのか。

ウイルザ・フィルニアイル

性別・男

一人称・僕

容姿・金髪に深緑の瞳。見た目は二十代前半だけど、結構良い歳（化け物）。何が可笑しいのかいつもヘラヘラしてる。ムカつく。

性格・明るく、年の割に結構子供っぽい。極度の親馬鹿。微ナルシスト。

宝物・子供たちが産まれたときから撮つてきた写真がおさめてある

アルバム。

備考・セルリア国の中王。カエデをアーリアの婿にむかえよつとたくらんでいる。

見返してみるとウィルザの紹介だけなんか酷い気がする。

男へのお礼

そ、そんな……、こんな可愛い子を俺のお嫁さんにするとか許されるわけないでしょ！

王様予想以上に常識ない！　え？　なに、俺が頭可笑しいだけなの？

……いや、そんなことないはず。だいたい会つたばかりだし……。

やつぱりそつこいつとつて、清く正しいお付き合つを重ねてから決めるべきだと思つんだよね。初めは文通。次にモールス信号でしょ。

俺のたつた一人のお友達が言つてたよ。

文通は文が返つてくるまでのあのドキドキ感が堪らないって。モールス信号は意思の疎通が出来るかどうか違う意味でドキドキするつて。

「おひ、お父様！！」

今まで驚きとショックで固まつていた姫様が叫んだ。

ほりつ！　見てよあの必死な顔！　姫様だつて嫌がつてるじゃんか！！

「カエデ様にはわたくしなんて釣り合いませんわッ！－！」

待つて！ なに言つてんの！？ 今俺が想像した言葉と真逆の言葉が飛び出したよつな……！ ていうか逆だよね！ 俺が釣り合わないよね！

「そんなことないってアーチャー

王様が苦笑しながら興奮する姫様を宥めた。

王様！ もつと言つて！ それでそのまま正気に戻つて！ 俺なんかを一族に迎えたら謀反されちゃうよ！ 一夜にして王国は崩れ去るよ！ 俺の顔面筋金入りだから！

「そんなことがありますわ！」

王様の説得も空しく、さらにいきり立つ姫様。いや、あの、ちょっと落ち着いて！ なんとか俺すつごく居た堪れない！

姫様の大声に何事かと集まり始めた兵士さん、メイドさんの視線が痛い！ 見てないで助けて！ 誰か！？

「カエデ様は強く優しく美しい方なのですよ！？ わたくしなんかが釣り合つわけがないじゃないですか！？」

ねえそれいつたい誰なの！？ 姫様にどんなフィルターかけたら俺はそんな人間になれるの！？

何を言つても聞く耳を持たない姫様に王様は困り顔だ。俺は羞恥で融けそう。融けていいかな？

「うーん……、それじゃ、カエデくんは、カエデくんはどう想う？ アーチャーのこと、悪くは思つてないでしょ？」

その言葉に姫様はピクリと反応して俺をじっと見つめた。
お、俺……？ 俺はどう思うかって、そりや勿論一つしか思つこ
とないでしょ。

「……俺にはこの子を幸せにしてやれる自信がない」

あと俺には勿体無い。だつてさあ、考へてもみてよ。明らか釣り
合ひとれてないじゃん。

片や一国のお姫様。片やヘドロ同然の俺だよ。全世界からブーリ
ング食らうよ。

それに俺と結婚していつたいなんの得があるの？ 習得できるス
キルは精々クリーチャーの調教スキルくらいだよ。何処で役に立つ
んだよ、そのスキル。

そう言つと、姫様と王様はハッと顔を見開いた。そう！ そんな
んだよ！ やつと気が付いてくれた！？ 俺の無価値さこ...

「そんなことありません！ カエーテ様と共に在れるだけでわたくし
幸せですわ！ 幸せすぎて心臓が破裂しそうです！ 破裂しましょ
うか！？」

しなくていいよ！ しなくていい！ 何処の殺人現場だよ恐
ろしい！！ なに破裂しましょうかって！！ 俺そんなこと初めて
訊かれた！！

王様もちょっとギョッとした顔で姫様を見てたけどすぐに俺に向
き直つて言った。

「そ、そうだよ！ 幸せに出来ないとかそんなこと考えなくたつて
大丈夫！ 家族の幸せは夫婦二人の手で掴みとるものでしょ！？」

ああ！ その言葉を言われたのが俺じゃなかつたら物凄く感動し
たのに！！

そんな良い台詞無駄撃ちしないで！ 使いどいろを見極めて！

ていうか、あれ！？ なんか話ずれてる！？

俺、幸せに出来る出来ないが気になるんじゃなくて、それ以前に
結婚はしないんだってば！！

「俺は人生に関わる大事なことを、簡単には決めたくない」

それに、今は結婚よりもしたい、大切なことがある、っていう言

葉は呑み込んでおいた。

これは完全に俺個人の問題で、王様たちには関係ないことだしね。

……結婚とかっても、人生の墓場なんて言われてるものだからね。俺も人並みに結婚生活に夢見てるけど、ちょっと怖い気持ちもあるんだ実は。

「……姫様は、とても素敵な女性だと思つ。だから、ゆつぐりお互
いを知つていきたい」

それで現実を見て下さい。姫様は今は夢見る乙女なお年頃だから
全ての異性に夢見ちゃってるんだよ、きっと。
だから俺みたいな醜男にも変なフィルターかけて全くの別人に仕
立て上げちゃったんだ。

「やつ……」

王様はそれだけ言つて頭を伏せた。落ち込んでいるようにも、何
かを考え込んでいるように見える。

なんだろう……。なんか王様つて失礼だけど碌なこと言わなさそ
う。

「カエデくんは、ゆつぐりアーチャーのこと、"知つて" いきた
いんだよね」

知つて、の辺りを嫌に強調して王様は言った。ちょっと不安そつた、期待したような瞳で姫様は王様を見つめている。

俺の知らないところでどんな話が進んでいるんだろう。俺、当事者のはずなのに部外者みたいな疎外感を感じる。

「それじゃ、親睦を深めるつて意味でお泊まり会しようよー、ね、良いよね！」

え、お城つてそんな簡単にお泊まり出来るの？ すっげえフレンドリー。良いね、平和だね。戦争起こらないね。

でも、そんなに急に泊まつたら迷惑なんじゃ……。

うーん……、結婚は正直気が進まないんだけど、お泊まり会つていう響きにはかなり心魅かれるものがある。

俺、誰かの家に泊まつたことも、自分の家に泊めたこともないんだよね。

人間に限らず言えば天井裏で鼠がいつも走り回つてゐるからある意味お泊まり会は毎日してるんだけども。でもそんな寂しいお泊まり会聞いたことないよね。

「そうですね！ 泊つていって下わーーー！」

「じゃ、こんなに言われたら断るのは逆に失礼かなあ……。
姫様の言葉を後押しするように王様も続ける。

「ううううーー あとで」飯も豪華ですか」「へ美味しいよー。」

「」「飯だと……！？ ええ、ビビリよー 豪華で美味しいってどんのが出るのかすっ」「く気になるー。」

俺が迷っているのに気付いたんだろう。王様はふふんと不敵な笑みを浮かべて、これで止めだと言わんばかりに口を開いた。
や、やめてええ！ これ以上俺を誘惑しないで！ 「飯だけでも心がぐらぐらなのに、これ以上なんて……！
そんな魅力的な誘いを断るなんて俺には……！

「今なら僕のサイン（プロマイドつき）もプレゼントー。」

……あつ、やつこつ……。

じつじよつかな……。「」飯。美味しい「」飯。食べたいなあ……。

「其処まで言つなら、一日だけナ……」

俺の言葉に姫様は可愛らしく頬を染めてきやあきやあと喜んだ。
そんなに喜ばれるとなんか照れるなあ……。
王様の田元にきらりと光る何かが見えた気がしたのはきっと氣のせいだわつ。

男へのお礼（後書き）

書いていただいた感想に興奮してなんとか今日中に一話だけでも修正終わらせて上げようと思つた結果がこれだよ！！文がなんか荒い気が……。勘違い要素、次はあんまりないかも……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336z/>

(精神的に)最弱な男の(周りが)最強伝説

2011年12月27日23時46分発行